みやぎの福祉の情報誌

福祉みやぎ

1 2022 月号

vol.619

タイトル 千切り絵「富士山」

作者 みなみデイサービスセンター 利用者の皆さま（気仙沼市）

コメント みんなでちぎり絵に挑戦しました。
雄大な富士山を制作しながら、今年こそは良い年でありますように…
良い年にします!!

CONTENTS（主な内容）

P2 特集 鼎談 地域共生社会の実現に向けて
～住んで良かったと思える、生き生きと自分らしく暮らせる地域に～

P6 ちいきをつなぐ
パラリンピックの出場選手から学ぶ

P8 ひと・まち・こころ
岩沼市高齢者等見守りネットワーク事業

P9 市町村社協レポート
まもりーぶにおける地域での見守り体制づくり

P10 グッジョブFUKUSHI
事業所インタビュー 他

P11 宮城いきいきシニアだより
ねんりんピック出場チームの紹介

P12 県社協掲示板

鼎談

地域共生社会の実現に向けて

～住んで良かったと思える、生き生きと自分らしく暮らせる地域に～

特定非営利活動法人
全国コミュニティライフサポートセンター
理事長 **池田 昌弘** 氏

東北学院大学
教養学部地域構想学科
教授 **増子 正** 氏

社会福祉法人
宮城県社会福祉協議会
会長 **加藤 睦男**

はじめに

加藤

まず、このテーマを設定した主旨について説明します。「共生社会」という言葉は、平成28年に閣議決定された「ニッポン一億総活躍プラン」に盛り込まれました。高齢化の中で人口減少が進み、孤立、ダブルケア、8050問題等、福祉ニーズが多様化している中、子どもや高齢者、障害者等住民が地域において自分らしく暮らしていける社会を幅広い住民の協働と参画によって作っていこうということで、「地域共生社会の実現」が言われ始めました。

宮城県では第4期地域福祉支援計画において、市町村や関係機関と連携を図りながら、また、被災地で行われてきた被災者支援の経験を生かして、地域共生社会の実現に取り組むこととしています。その足掛かりとして、プラットフォームとなる（仮称）「宮城県地域福祉推進会議」が設置されることになります。この会議には宮城県とともに宮城県社会福祉協議会（以下「県社協」という。）も一体となって関わっていくことになるので、参考になるお話をいただきたいとテーマを設定しました。

では増子先生、最初に地域共生社会の実現に向けて大学で取り組まれていることをお聞かせください。

SDGs※と地域共生社会の目指すところは同じ

増子

大学として地域共生社会の実現に向けてという文言を教育理念や教育目標に掲げているわけではありませんが、普段私が関わっている中で、地域共生社会とつながるかなというお話しをさせていただきます。

SDGsの達成に取り組むことは、持続可能な地域を作ることになりますし、全ての人が住み続けられるまちづくりにつながることになります。すなわち目指すところは同じだと思います。

地域構想学科では、人と自然、社会と産業、健康と福祉という三つの領域から、地域の課題解決にアプローチしています。一つ例を紹介しますと、健康と福祉の領域では、地域の方たちと一緒に、買い物に不自由を感じている高齢者

※SDGs（持続可能な開発目標）2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。

の安否確認を兼ねた買い物支援に取り組んでいます。

SDGsを意識した教育・研究活動が地域づくりにつながって、安心して暮らしやすいまちづくりに、地域共生社会の実現につながっていくものだと感じています。

加藤　ありがとうございます。では池田理事長、法人としての取組はいかがですか。

東日本大震災で経験した『地域で支え合うことの大切さ』を伝え続ける

池田　私ども全国コミュニティライフサポートセンター（以下、「CLC」という。）は、1999年に、誰もが地域で普通に暮らせる社会の実現を目指すことを理念に発足したので、その意味では地域共生社会を目指す団体だったとあらためて感じます。小規模多機能ケアや地域共生ケア、ユニットケアなどを、全国で先駆的に取り組んでいる方々と一緒になって、制度に結びつける活動を行ってきました。

10年前の東日本大震災の際には、今までのつながりが切れてしまった被災者の新たなつながりづくりを支援する生活支援相談員等に関わり、地域支え合いに関わる様々な研修に生かしてきました。そして、この研修は、その後の生活支援コーディネーター養成研修につながりました。

もう一つ、仙台市内で24時間、365日いつでも受け止める居場所の取組も行っています。運営には連合町内会長や町内会長、地区社協会長等に関わっていただいて、地域も一緒になって関わることが地域共生社会なんだということを実感しています。

加藤　ありがとうございます。増子先生、先生ご自身の活動で地域共生社会実現の延長線上にあるお話など、お伺いできますでしょうか。

子どもたちは遊びながら多様性や工夫を学び、地域共生社会実現の担い手になる

増子　私は子どもたちと遊ぶ活動を15年ほど続けています。子どもたちと学校に泊まったり被災地を訪問したり、茅葺屋根の材料にもなる葦（あし）を使って縄文人が乗っていただろうと推測される6メートルほどの草舟を作って広瀬川で乗ったり。その活動に地域の高齢者の方々が一緒に食事を作ったり、いろいろお手伝いしていただいています。自然に異世代交流と相互理解が生まれていると思います。

もう一つ、車いすバスケットボールの体験を、パラリンピックに出場したチームの方に来ていただいて行いました。子どもたちはその中で、種目やルールを工夫することで誰でもスポーツに参加できるんだと学んだと思います。地域の中でもいろんな人たちが暮らしているわけですから、その人たちと暮らしていくために、何かを工夫することで共に暮らせることを、遊びながら知ってもらえれば、いずれ意識しなくても地域共生社会の実現の担い手になってくれると良いな、という思いで活動しています。

加藤　楽しみながら異世代交流をしたり、高齢者の生きがいになったり、自分たちのいる社会は多様な人たちで構成されていることを学んだりする、とても良いお話ですね。

では池田理事長のパーソナルな活動についてお話しいただけますか。

リアル遠距離介護者として地域から学んだこと

池田　増子先生のお話を伺って、地域には様々な課題はありますが、高齢者や障害者、地域の方々が、自分のできることを生かし、みんなで活躍し合うことが結果として地域課題の解決につながっていると思います。

実は今私はリアル遠距離介護者になっています。母親が救急搬送されて、ダウン症の弟が初めて自分で一人暮らしをすることになりました。私が外に出てから移り住んだ所なので、私はご近所さんをよく知りません。今回向こう三軒両隣のお宅に、ひと月の間

5回ずつ母親と弟の状況を説明に伺いましたが、どなたからも弟が一人暮らしをしていることに困りますとか不安ですとかというお話はありませんでした。私はご近所さんが一人暮らしの弟を受け止めて、気にかけてくれていることが最大の応援団だと感謝しています。また弟の相談員さんも何か困ったことがあったら私に相談してくださいと、ご近所を歩いて話してくださったことが、ご近所さんにとっては安心感につながったのではないかなと思いました。

加藤　弟さんのあるがままを地域で認めて自分らしくいられる、そういうことができる環境はとても大事だなと思いますし、広い意味での地域共生社会につながっていくという思いがしますね。

池田　制度サービスと地域住民の方と本人や家族との関係をうまくつないでいくことが、あらためて大切なことだなと感じています。

加藤　そのような場面に関わる方、コミュニティソーシャルワーカー、いわゆるCSWに関する講座を増子先生の大学では行っていらっしゃいますが、その目的やどのような方が受講されているか等教えていただけますか。

地域と個人をつなぐ人材育成

増子　そうですね。地域でいろんな人たちが抱えている課題を解決するためには、そこに住んでいて地域のことをよく知っている人たちが課題解決に参加することが必要になります。しかしそこをどう、住民の人たちに参加していただくか、そこをコーディネートしていく人が必要で、それがCSWであると思います。

そこで本学では、2016年から、実際にCSWと呼ばれている方々の活動をバックアップするためにスキルアッププログラムを開講しています。市町村社協のCSWの方、NPOの方、企業の方等実際に活動されている方々の他、地域福祉に関心のある学生も受講しています。全国にも珍しい取組ということで、今年度は北海道の方も受講されています。

池田さんのように第一線で活動されている方やうちの大学や他大学で教育関連の研究を行っている方々が講師を務めています。このような取組が地域共生社会の実現につながっていけばよいと思います。

加藤　ありがとうございます。この宮城県から、地域共生社会の実現に向けて力となる人材が輩出されることを心強く思います。

それでは冒頭に少し触れましたが、今年度宮城県と本会とで、地域共生社会の実現に向けて機運を醸成するためのプラットフォーム、（仮称）「宮城県地域福祉推進会議」を設置します。これには市町村や市町村社協の他、地域福祉に関わる幅広い団体にもご参画いただくこととしておりますが、お二人にこの推進会議を立ち上げて運営するにあたって、ヒントとなるお話をいただけますか。

適度な迷惑をかけあうことが実は支え合い

池田　県下のいろいろな取組や情報を共有する推進会議のような場はとても大切で、そこを県社協が担うことも意義あることだと思います。

最近、高齢者を含めて単身世帯が多くなってきています。私たちは育ちの中で、人に迷惑をかけないようにとしつけられてきました。でも実は、適度に迷惑をかけ合うことこそが「支え合い」なのですが、助けられることが苦手で

す、気にかけ合い、つながりを保つことが、孤立の防止にもなっていくと思います。

また近所のお店が地域の見守り拠点になっていたり、喫茶店がサロンの場になっていたりと、いろいろな産業の方も実は福祉に携わっているということを、ぜひこの推進会議の場で共有できると良いなと思います。

データを集積して発信する役割

増子　宮城県という県域だからできることがあると思います。私は七ヶ浜町の地域福祉推進会議に関わっていますが、市町村ごとに地域資源や状況、課題が違うと思いますので、市町村ごとの多くの情報を調査することが必要です。参加する市町村や団体にヒントとなるようなデータを集積して、また発信していくのもこの推進会議には求められるのではないかと思います。

私は市町村や市町村社協の計画策定に関わらせていただいて、調査活動ではゼミの学生にもお手伝いいただいていますので、この会議でも調査等行う際はぜひ学生を参加させていただけると、実学を兼ねて良い教育の場になると思っていますので、よろしくお願いします。

加藤　ありがとうございます。推進会議の開催に向けていろいろお話をいただきました。お二人には引き続きアドバイスや助言を頂戴できればと思います。

では最後に一言ずつお願いします。

計画策定は良き理解者を増やすチャンス

増子　私は地域福祉活動計画の策定に関わらせていただいていつも思うことですが、住民の方々が計画策定に関わることで、自分たちは何ができるのか、どう関わっていくのか等を考える機会になる絶好のチャンスだと思います。ですからこれから策定を検討されている自治体や社協は、ぜひ良き理解者を増やすチャンスだと思って、積極的に取り組んでいただければと思いますし、そんなアプローチを県社協からも発信していただきたいと思います。

地域の関わりと制度をどう重ね合わせていくか

池田　先ほど私の家族の話をしましたが、母親には介護保険サービス、弟には障害福祉サービスと、制度・サービスは充実してきましたが、高齢者と障害者の世帯を丸ごと支えるには、まだまだ課題があります。複数の制度を組み合わせたり、地域の見守りなどを含めて重ね合わせて支援を考えていく、今年度新たに制度化された「重層的支援体制整備事業」を生かしみんなで考えていくことがとても大切だと思います。

住んで良かったと思える地域に

加藤　お二人には貴重なお話をいただきまして、どうもありがとうございました。

私たち宮城県社協も、この宮城県が「住んで良かった、生き生きと自分らしく暮らせる」という地域になるよう、市町村社協、諸団体、県共同募金会等とも連携して、地域共生社会の実現に向けて微力ながら、会を挙げて取り組んでいきたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

東京2020パラリンピックから学ぶ
～障がい者スポーツを通した社会参加と地域共生を目指して～

2021年夏に開催された「東京2020パラリンピック」（以下、パラリンピック）では、選手が全力でプレーをする姿に、多くの人が心を揺さぶられました。宮城県障害者スポーツ協会の小玉氏のお話と、車いすバスケットボール（以下、車いすバスケ）チーム宮城MAX選手へのインタビューから、障がい者スポーツを通した社会参加について紹介します。

▲宮城県障害者スポーツ協会
小玉一彦　理事長

障がい者の社会参加の推進における障がい者スポーツの役割と地域に期待すること

2020東京パラリンピック競技大会が、新型コロナウイルス感染拡大による1年延期という前例のない中開催され、男子車いすバスケットボールの史上初の銀メダルをはじめ、金メダル13個を含む51個のメダルを獲得し、金メダルランキングは11位に躍進するなど盛況のうちに終了ました。

日本代表選手の活躍もあり、大会期間中は連日のようにテレビ、新聞などのマスコミによる報道がなされ、障がい者スポーツの話題に触れない日はなかったように思います。

そんな東京パラリンピック競技大会を、一過性のスポーツイベントに終わらせることなく、今大会を契機に障がい者への理解が一層進み、障がい者が身近な地域においてスポーツに親しむことができる社会の実現に向けた障がい者スポーツの普及促進への取組が求められています。

障がいを持つ方々がスポーツを行うには、障がいの特性に応じた工夫や配慮が必要になります。障がいの種類や程度に応じてルールや用具、動き方を変更あるいは新たに考案して実施するところに特徴があります。そのため、一般のルールや用具では運動を行うことが難しい子どもや高齢者等へのスポーツの導入のツールとしても使用できますし、障がいのある人もない人も、共に実践できるスポーツとしての可能性が期待できます。

また、スポーツは「する」だけではなく、イベント運営やサポートを行うボランティア、審判や監督、コーチなど「支える」存在も重要です。選手やチームの応援、企業によるスポーツ用具の提供、イベントへの協賛などもスポーツを「支える」活動に含まれます。そして、「支える」スポーツは、選手と同様に感動や興奮を共有することができます。

障がいを持つ方々がより身近な地域で活動するためには、それらの環境を整え、多くの人が一緒に楽しむことで、自然な形で障がいへの理解を深めていくことができるなどの効果も期待できます。

宮城MAX 選手紹介

豊島 英 選手
（とよしま あきら）
所属：㈱WOWOW

生後4ヶ月の時に髄膜炎を発症し、両足に障がいを負う。両足はほとんど動かせず、体幹機能も万全ではない。車いすバスケの出会いは特別支援学校の体育教師にすすめられた講習会。車いすバスケの「スピード」に魅了され、地元のチームで始める。2009年、宮城MAXに入る。その翌年、日本代表に選ばれると持ち前の「スピード」を活かしたプレーでロンドン大会や世界大会で活躍。2015年4月に、バスケに打ち込みたいと株式会社WOWOWに入社。パラリンピック3大会連続出場。東京2020パラリンピックではキャプテンとして、銀メダル獲得に貢献。

藤本 怜央 選手
（ふじもと れお）
所属：㈱SUS

小学3年生の春、交通事故で右足の膝下を失う。義足を履き、小学時代は主にサッカー、中・高校時代はバスケに熱中。高校の終わりに出会った車いすバスケに魅せられ、「立ってやるより、スピーディーで面白いバスケができる」と思い、車いすバスケに転向。日本選手権11連覇。パラリンピック5大会連続出場。東京2020パラリンピックではチームの大黒柱として、銀メダル獲得に貢献。

車いすバスケチーム「宮城MAX」の活動について

宮城MAXは、宮城県を拠点に活動する県内唯一の車いすバスケチームです。天皇杯日本車いすバスケットボール選手権大会においては、2008年より11連覇という偉業を達成した強豪チームであり、パラリンピックでは4人の選手が日本代表に選ばれました。パラリンピックでも見事なプレーをみせ、車いすバスケ日本代表至上初めての銀メダルを獲得し、輝かしい成績を残しています。今回は、日本代表として活躍した、豊島 英（とよしま あきら）選手と藤本 怜央（ふじもと れお）選手を取材しました。

▲プレイ中の豊島選手

パラリンピックの影響をどのように感じていますか？

藤本選手：パラリンピックを契機に、車いすバスケの認知度が向上したことを嬉しく思います。それと同時に、スポーツの魅力を伝え、積極的に広めていくことの重要性も感じました。障がいの有無に関わらず、車いすバスケに興味を持った人が歩み寄ることのできる広い窓口が必要だと考えています。

障がいがある人もない人も歩み寄るために、どんなことが大切なのでしょうか？

豊島選手：宮城MAXでは、競技力の向上ももちろん大切にしていますが、地域の方々との交流も大切にしています。例えば、小中学校から車いすバスケ体験や講演会の依頼があった時には快く受け入れています。そこでは、障がいを持っている人たちに見た目の違いやハンディキャップがあっても、一緒にスポーツを楽しめることや、スポーツを通じてお互いのことを理解し合えることを体験することができます。また、車いすバスケは、今や障がい者だけでなく、健常者も一緒にできるルールに変わっています。障がいの有無に関係なく、みんなで一緒に楽しめる環境を整備すること、それを広めていくことが大切だと考えています。私たちのチームにも気軽に見学に来ていただき、身近なスポーツとして感じてもらえると嬉しいです。

▲地域の人たちと車いすバスケを行い、交流する様子

スポーツの力で共生社会を目指すために、地域社会へどんなことを期待しますか？

藤本選手：障がい者と出会う場や交流する場がもっと増えるといいと思っています。私たちは、スポーツの楽しさや障がいへの理解等、伝えたいことがたくさんありますが、私たちだけでは発信するにあたって限界があるので、様々な関係者と連携して広めていきたいと考えています。それらを伝えていき、共感してくれた人がさらに周囲の人へ広めていくことができる社会になると嬉しく思います。

今後の展望について教えてください

藤本選手：パラリンピック以上の感動を与えられるように、競技者としてさらに成長したいと思っています。また、スポーツを通じて健常者と障がい者の距離感を縮めていけるよう、自分にできることを見つけていきたいと考えています。

豊島選手：パラリンピックでは多くの人に支えられ、メダルを獲得することができました。これからは、地域の人々と交流する機会を通じて、感謝の気持ちを伝えていきたいです。

▲車いすバスケの楽しさを伝えている藤本選手

まとめ

3者のお話からは、障がいの有無に関わらず、様々な人が障がい者スポーツを通して関わり合うことで、相互理解が広がる可能性を伺うことができました。宮城県社協として、障がい者スポーツを通した障がい理解の促進と地域の様々な人が参加可能な機会の拡大を応援していきます。

画像協力…一般社団法人チームスマイル

ひとまち こころ

認知症高齢者等見守りネットワーク事業

～捜索サポーターさんの参加と協力で捜索模擬訓練を行いました～

岩沼市健康福祉部介護福祉課

岩沼市では、平成29年6月から認知症高齢者等見守りネットワーク事業（旧：徘徊高齢者等情報管理事業）として、認知症等の方が行方不明になった際の早期発見・保護につなげるため、ご家族等からの申請による「事前登録」や「認知症高齢者等捜索サポーター」（以下、「サポーター」という。）として捜索にご協力を頂くボランティアの登録を行っています。令和3年11月現在、約200人のサポーターが登録されています。先日、初めての試みとして、サポーターを対象にした「捜索模擬訓練」を行いました。あらかじめ、2つの徘徊コースを設定し①対象者に声をかける②市に連絡する、を訓練内容としました。広報いわぬまを活用し、認知症についての周知啓発や訓練の告知を行い、サポーターへの登録の呼びかけたところ、身近に起こりうることとして受け止めてくださり、うれしいことに訓練までに登録数が増えていきました。訓練ではまず、市から捜索を呼びかけるメールをサポーターに配信します。メールには、対象者の特徴（年齢、背格好、帽子や杖、服の色など）を詳しく記載しています。約1時間の訓練でしたが、サポーター5名、コース上の店舗の店員さん2名、計7名にご参加をいただきました。

参加者からは、「事前に情報が分かっていても、本人だと確信するまでに時間がかかった」「実際に声をかけるには勇気がいった」「どこかに座ってもらい、安全を確保してから電話することが大事」などの感想がありました。また、対象者役のボランティアさんからは「訓練だとわかっていても、急に知らない人から声をかけられるとびっくりするもんだね。でも、挨拶してから話し始めてくれたり、穏やかな声だと安心したよ。電話かけるから待ってて、などと声をかけてもらうと認知症の方は安心するんじゃないかな」との感想をいただきました。初の試みとなった訓練でしたが、実際に行なうことで見えた課題、参加していただいた皆さんの感想から気づかされた対応のポイントなど、多くの学びやヒントがありました。認知症は、とても身近な病気です。自分のできる範囲で助け合うことが、認知症の方本人にとってもご家族にとっても大きな安心と力になるものだと実感しました。

▲竹駒神社前で声をかけてもらいました。

▲座ってもらい、その間に市役所に電話をしています。

市町村社協 レポート

まもりーぶにおける地域での見守り体制づくり

～石巻市社会福祉協議会の取組～

日常生活自立支援事業（愛称：まもりーぶ）は、平成11年10月から事業が始まり、今年で22年が経過しました。社会福祉協議会では、地域福祉を推進するうえで、判断能力が不十分な人の権利を擁護するためこの事業に取り組んできました。今号では、仙台市を除くと県内で最多の利用者と契約し、地域における包括的な相談支援体制づくりを通じて「地域共生社会」の実現を目指す石巻市社協の取組を紹介します。

まもりーぶ＝金銭管理と思われがちですが、利用者の生活状況の変化や困りごとについて把握することも大切な役割となっています。事業を担当する、石巻地域福祉サポートセンターの吉田篤専門員は「利用者が抱える生活課題は複雑化しており、様々な立場の支援者による包括的な関わりがなければ生活が成り立たない方も多い」と話します。その中から、専門職だけでなく、近隣住民や企業などを含めた見守り体制を築いている例を紹介いただきました。

民生委員と連携した見守り

市内で独居生活を送っていた高齢の女性は、認知症による「もの盗られ妄想」の症状が現れることがあり、民生委員が定期的に訪問していました。まもりーぶ利用にあたっては、生活の様子や困りごとに関する質問に答えていただくことが必要になるほか、預金通帳をお預かりしての支援を提案する場合があります。このとき、不安に寄り添いながら、丁寧に気持ちを引き出すことが必要になるため、本人が信頼する関係者に同席を依頼する場合があります。この方は、民生委員に立ち会ってもらうことにより、リラックスした雰囲気の中で正直な気持ちをお話しいただくことができました。契約後はまもりーぶの生活支援員が訪問していますが、民生委員による見守りも継続し、小さな困りごとにも対応できる体制づくりを心掛けました。

タクシー会社との連携

高次脳機能障害をもつ男性は、十分な所持金を持たずにタクシーを利用し、支払いができなくなることがありました。市内の一部のタクシー会社では、認知症や障害により何らかの支援を要する可能性がある顧客のリストを作成し、家族や福祉関係者と連絡が取れる体制を築いています。この方についても、よく利用するタクシー会社とまもりーぶで連携し、料金が不足した場合は連絡が入る体制が整えられています。

まもりーぶで支援できる範囲は限られています、「利用者に関わる人と繋がり、役割分担をしながら支援することが求められている」と話す吉田専門員。型にはまらず、ニーズに合わせた支援を行うことが、その人の権利を擁護することに繋がります。本事業の実施主体である宮城県社協としても、権利擁護支援の地域連携ネットワークを構築し、「地域共生社会」が実現できるよう、これからも市町村社協と協働していきます。

（宮城県社協取材）

▲石巻地域福祉サポートセンター専門員の皆さん。
新社屋を拠点に日々奮闘しています。

▲まもりーぶのロゴマーク

グッジョブ FUKUSHI

このコーナーでは福祉に関する仕事や団体などについて紹介します！

＊事業所インタビュー＊

社会福祉法人ロザリオの聖母会 児童養護施設仙台天使園

〒982-0252　仙台市太白区茂庭台4-1-30　TEL 022-281-5181

今回は、社会福祉法人ロザリオの聖母会 児童養護施設仙台天使園にお邪魔し、児童養護施設の仕事内容や仕事のやりがいについて、土倉園長とユニットリーダーの青山さんにお話を伺いました。仙台天使園では6歳から19歳までの入所児の皆さんが生活されていますが、今回は、青山さんが担当している中高生中心の内容となっています。

Q.仕事内容・一日の流れについて教えてください。

【青山さん】

朝は起床の声掛けから始まり、朝食の準備、食事の後に子どもたちの通学準備の見守りや手伝いをします。学校へ送り出した後は、掃除等の環境整備や各関係機関との情報共有などを行っています。下校後、子どもたちは余暇の時間を過ごし、園内清掃、夕食の後は消灯まで自由時間となります。その間は、悩みがある子の相談に乗ったりもしています。

【土倉園長】

現在、児童養護施設では「家庭的養護の推進」に力を入れています。グループホームはもちろんですが、大きな厨房がある本体施設でも、職員がユニットのキッチンでそれぞれ調理をして子どもたちの食事を用意する機会が増えています。

Q.入所児の皆さんと接する際に心がけていることや大切にしていることを教えてください。

【青山さん】

私は中高生の女子を担当していますが、基本的には高校卒業後は園から自立していく子がほとんどなので、自立後のことを考えた支援をしています。卒園後は一人暮らしをするケースもあるので一人暮らしに必要なことや、人間関係で悩んでいる子には自立後は自分で解決していかなければならないこともあるといったことを、日常会話の中で話しています。

また、中高生ということもあり異性に興味を持ち始める時期でもあります。興味を持つことは良いけれど、犯罪に巻き込まれず、自分で自分を守る方法を伝えたりもします。最近はスマートフォンを持っている子がほとんどで、SNSのトラブルも時々見られます。そのような時は、園で生活している間に失敗するのは良いから、自立後は失敗しないように、ここで学ぼうというようにアドバイスしています。

Q.仕事の中でどのようなことをやりがいに感じていますか。

【青山さん】

様々な悩みや問題を抱えている子もいますが、下校後に学校での出来事や友達とのことを楽しそうに話している姿を見ると、自分も嬉しい気持ちになります。

また、今担当している中高生は、小学生の頃から天使園で生活している子がほとんどです。その頃は思うような生活ができずにいた子もおり、自分も関わりの中で衝突したり、言い合ったりすることもありました。それでも、現在前向きな生活を送っている様子を見ると、当時の経験や伝えたことが間違いではなかった、しっかりと生きているんだと感じ、それがやりがいとなっています。

卒園後の状況を報告しに来てくれる子もいますが、そのような時に生活の様子を知ることができ、励みにもなっています。

Q.入所児の皆さんの将来に期待することは何ですか。

【青山さん】

何より無事に、普通に生活してくれることを望んでいます。また、前向きに生活して、やりたいことに挑戦できる環境にあれば尚更嬉しいです。

【土倉園長】

卒園する子の中には進学する子もおり、そのような場合には自立支援金という基金で1年分の学費や家賃等の援助をすることもあります。また、自立生活が難しくなるケースもありますが、アフターという担当を置いており、自立後のケアにもあたっています。

このような制度を利用したり、アドバイスを受けたりしながら、健全で充実した生活を送ってほしいと思います。

児童養護施設とは…

児童福祉第41条に定められた児童福祉施設。さまざまな事情により家族による養育が困難な2歳からおおむね18歳の子どもたちが、家庭に替わる家で協調性や思いやりの心を育みながら生活している。

【全国児童養護施設協議会ホームページより抜粋】

仙台天使園のある一日の生活

6:30	起床
7:00～ 8:00	朝食、朝の祈り
15:00～17:00	下校
17:00～17:15	掃除
17:15～18:30	夕食、夕の祈り
18:30	入浴、学習、自由タイム
19:30～	幼児就寝
20:00～	小学生就寝
21:00～	中高生就寝

▲土倉園長、青山さん

「福祉のお仕事魅力探究セミナー」を実施しています！

県内全域の小・中学校、高校を対象に、「福祉のお仕事魅力探究セミナー」を実施しています。福祉の職場や仕事内容、やりがいについての講話をしたり、介護職の視点を入れた高齢者体験、バリアフリー体験などを行ったりと、福祉の仕事に触れ、理解を深めてもらうことを目的とした内容となっています。

今年度からの新たな取組ですが、今後も若年層に対する福祉啓発と福祉職のイメージアップを図り、将来の人材確保の一環として継続的に行います。

▲小学校での講話

▲中学校での高齢者体験

Twitter
フォローしてね♪
@miyagijinzaic

福祉のお仕事 FUKUSHI-JOB SEARCH
検索 https://www.fukushi-work.jp/

宮城県福祉人材センター
TEL：022-262-9777
貸付専用TEL：022-399-8844

宮城いきいきシニアだより

第33回全国健康福祉祭ぎふ大会「ねんりんピック岐阜2021」は中止でしたが心は神奈川へ

「ねんりんピック」の愛称で親しまれる「全国健康福祉祭」は60歳以上の高齢者を中心とする、スポーツ、文化、芸術や健康と福祉に関する総合的な祭典です。

昨年、1年延期となったねんりんピック岐阜大会は、令和3年度においても新型コロナウイルス感染症の収束が見通せないまま、全国的な拡大の影響を考慮し中止が決定されました。

今回の宮城いきいきシニアだよりでは、岐阜大会に出場予定だったチームを代表して、太極拳チーム『稀（まれ）』の活動の様子をご紹介します。

お話を伺ったのは、チーム代表の藁科（わらしな）わきさんと、当日指導にあたっていた塩釜市太極拳協会の遠藤利子指導部長です。

チーム『稀』は塩釜市太極拳協会に所属している会員7名でチームを組み、現在3年目になるそうで、毎週金曜日に塩竈市内で活動しています。チーム名の由来は、古希を迎えるメンバーが多かったことから『稀』になったとのことです。メンバーが太極拳を始めた理由はそれぞれですが、代表の藁科さんは「膝を痛めたことがきっかけで、足腰の筋力を鍛えるために始めました」と話してくださいました。太極拳はひとつひとつの動きが非常にゆっくりなことから、体幹の強化につながり、転倒の予防対策にも効果があるということです。

協会では体験教室を随時開催し、参加者を募ってはいるものの、太極拳と聞くと「年寄りがやるもの」とのイメージがまだまだ根強いらしく、若い会員が少ないことを残念がっていました。

この日は、岐阜大会で披露する予定だった平原綾香の楽曲「朱音（あかね）」にちなんだ茜色の衣装に身を包み、息の合った演武を披露していただきました。

チームのメンバーは、全国の仲間との交流が大変刺激になるということで、ねんりんピックという大きな目標があるから普段の練習にもやりがいを持って取り組めると話していました。みなさん、岐阜大会の中止を大変残念がっており、このまま終わりにしたくないとの思いを強くし、「あなたひとりの体じゃない」をチームの合言葉に、日々の健康管理に努めながら、来年のねんりんピック神奈川大会への出場を目指して練習に励んでいます。

▲練習の様子

▲茜色の衣装でポーズ

▲宮城県選手団ユニフォームを着用して

ねんりんピック神奈川大会のご案内

来年度開催予定の第34回全国健康福祉祭神奈川・横浜・川崎・相模原大会「ねんりんピックかながわ２０２２」は、神奈川県内26市町で32種目のスポーツや文化種目をはじめ、小さなお子様からご高齢の方まで楽しんでいただけるイベントも多数開催予定です。会期は令和４年11月12日（土）から15日（火）までとなります。興味のある方は大会ホームページをご確認ください。

【右のQRコードから入れます】

第34回 全国健康福祉祭 神奈川・横浜・川崎・相模原大会
ねんりんピック かながわ2022
神奈川に 咲かせ長寿の いい笑顔
未病改善でスマイル100歳
2022/11/12㊏－2022/11/15㊍

福祉みやぎ
vol.619
令和4年1月15日発行

県社協掲示板 Information

● 第67回　宮城県社会福祉大会を開催しました

令和3年11月11日に仙台サンプラザホテルにて第67回宮城県社会福祉大会を開催しました。

本大会は、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らしていけるよう地域福祉の推進に地域住民・社会福祉関係者・行政の三者が一丸となって取り組むことの重要性を再認識するとともに、永年にわたり本県の社会福祉の発展に御尽力いただいた方々を表彰し感謝の意を表することを目的としています。今回は昨年と同様、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、規模を縮小して開催いたしました。

● 宮城いきいき学園　令和４年４月入学生を募集します！

宮城いきいき学園は、生きがいと健康づくりのための必要な知識を身につける学びの場です。

対　　象：県内居住の60歳以上の方
場　　所：①仙南校　②大崎校　③石巻校　④気仙沼・本吉校　⑤登米・栗原校
　　※通学可能であれば、どの学校に申込んでも結構です。
募集人員：各校40人
学 習 日：年間21日(2学年制)
入学金・受講料等：入学金：5,000円　　受講料：20,000円(年間)
募集期間：令和3年12月1日から令和4年2月28日まで
申 込 書：本会ホームページ、各市町村の高齢者福祉担当課、生涯学習担当課、社会福祉協議会から入手できます。

「同期の仲間と楽しく学んでみませんか？」

NHK ARCHIVES アーカイブス

回想法ライブラリー

なつかしい物や映像を見て思い出を語り合う回想法は、脳を活性化し情緒を安定させ、長く続けることで認知症の進行予防やうつ状態の改善につながるといわれています。そして、高齢者の認知症予防や認知症患者の心理療法、リハビリテーションに活用されています。NHKの回想法ライブラリーでは、施設や家庭で手軽に回想法を行えるように、NHKに保管されているアーカイブスを利用して、むかしの番組やニュースの映像を提供しています。

アクセス方法は2つ

●PC
「宮城県社会福祉協議会ホームページ」のバナーからアクセス！
●スマホ・タブレット
右の2次元コードからアクセス!!➡ ➡ ➡ ➡ ➡ ➡ ➡ ➡ ➡ ➡

宮城県内の福祉施設･介護事業者向けの総合補償制度

宮城県地域福祉総合補償制度をご利用下さい

ポイント1
社会福祉協議会の会員である社会福祉施設、介護サービス事業者が加入できます。

ポイント2
地元宮城県で加入手続き･事故対応･その他アフターフォローを行いますので安心です。

ポイント3
団体制度のため、有利な団体割引が適用されております。(一部適用外)

オンワード･マエノのサイトにリンクします。

お問合せ
社会福祉法人宮城県社会福祉協議会　TEL022-225-8476
三井住友海上火災保険株式会社　TEL022-221-3171
株式会社オンワード･マエノ　TEL022-762-9915

※この制度の各補償は宮城県社会福祉協議会が保険会社と締結した保険約款により行います。

この印刷物は、植物性油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。

「福祉みやぎ」は宮城県社協のホームページでもご覧になれます。また、ご意見、ご感想、とりあげて欲しいテーマなどをお寄せください。表紙の作品も募集しています。

編集・発行／社会福祉法人 宮城県社会福祉協議会　〒980-0011　仙台市青葉区上杉1-2-3　TEL 022-225-8476(代)　FAX 022-268-5139
印刷／株式会社ソノベ　奇数月15日発行　URL http://www.miyagi-sfk.net/